

今月の谷口雅春先生のお言葉

すべてを一体として愛するのが日本人の精神

日本人は古来から、すべては一つの信念をもっている

日本民族は総てバラバラに分かれているのを一つに綜合するとところの天分を持っているのでありまして、日本の国の名前を「大和」と名づけられたということも、「や」というのは「弥々」と云う字が当てはまるので、いよいよ多いという意味であります。「ま」というのは「纏める」という意味であります。弓で射る「的」を「まと」というのも、同じことでありまして、中心に「纏まって」いる姿を現わしています。いろいろな分

かれていても、その悉くが一つに纏まるべきものであって、決してバラバラのものは存在しない、宇宙は一つである、世界は一つであるというところのその人生観が、古代の日本民族を通して現在の日本民族に至るまでずっと貫き通しているところの民族的信念とでもいべきものなのであります。

(新装新版『真理』第3巻241頁)

日本の建国の理想は「愛」である

日本民族は、人類互に相和そうと云う理想をもって、

国をはじめたのでありまして、「大和」の国号がそれを示しているのであります。これが日本建国の精神なのであります。「形は心をあらわす」と云う諺ことわざがありますが、日本人の発明した風呂敷ふうしきを見ればわかります。風呂敷はどんな形のもので、その形を毀こわさずに一緒に包んでしまふことが出来るのであります。他の国を毀して併吞へいどんするのは霸道はどうであつて、日本の皇道こうどうではありません。日本の精神は風呂敷精神であります。総すべての物を毀すことなく一つに包んで「人類」と兄弟となり一家族となるのを建国の理想としているのが日本民族であります。(中略)

「人類は互たがひに一つだ」と云う大和だいわの精神が、日本精神でありますから、日本の建国の理想は「愛」だと云うことが出来るのです。「愛」と云うのは、どの人種も、元は一つと云う自他一体の自覚であります。自分と他とは形の上では別々であつても、生命は一体だと云う自覚です。「私はあの人を愛する」と云うことは、あの人と私は本来一つである。そこで彼の悦よろこびを私の悦よろこびとし、彼の悲しみを私の悲しみと感ずる、これが「愛」

であります。それは、或あるいは男女の恋愛のようにも現われ、或あるいは父母親子の愛と云うような関係にも現われ、或あるいは家族が一体であると言ふ感じの家族愛と云うものになつて現われ、或あるいは国を愛する愛国心ともあらわれ、或あるいは人類を愛する人類愛ともなつて、あらわれます。吾々われわれはこれらの色々の愛を、その内の一つでなく、みなことごとく調和した相すがたで愛し得るうように努力するとき、偏かたよつた人間ではなく「全人ぜんじん」としての完全な人間の魂たましいがみがかれるのであります。

(新装新版『真理』第3巻232～233頁)

日本の「実相」を見出せば生甲斐いきがひがでてくる

愛し得る値打ねうちのある国というものがあれば愛するけれども、愛し得る国としての資格があるかわからん現状のような日本国では愛することができないというのは、それは国というものを、唯ただ、単に形にあらわれている現状の国——即ち現象の国家——だけを日本国だと思

っているために、こんなに強盗や、強姦や、失業者や、ストライキや、戦争や、つまらないことばかり充滿している此のような国家は、愛することはできないということになるのでありますけれども、その現実の奥に「理念の日本の国」なるところの、目に見えざる「国の本体」なるものをみたならば、其処に希望が生まれ、其の国に生きていくことに、生甲斐を感じ、其の国を愛することができるようになります。外面の現象は如何にともあれ、それを内在の理念——理想に近づけて行くところに希望が持て、勇気が出、生甲斐が感じられて来るのであります。此の肉眼には見えないけれども、既に在るところの日本をつくり出した「完全模型」即ち「実相」というものを、智慧に依って直観して、それを見出し、そうした完全模型（理念）に向って、国を推し進めつつある日本国民が自分だ、という自覚が出て来たときのみ、本当に日本人としての生甲斐が感じられてくるのであります。

（新装新版『真理』第7巻272～273頁）

日本を愛することで真に世界に貢献できる

日本に生れた日本人は日本を愛し善くすることによって世界に奉仕し、人類に貢献すべきであります。日本人が日本的であることが、世界のためになるのは、桜の木が桜の花を咲かせることによって人類を喜ばすのと同様であります。国民がその国土に生れて、その国土から恩恵を受け、自分が現在安穩に生活を続けられているのも全て国土のお蔭です。国土の恩と同時に、その国土の開発につぶさに艱苦を嘗めつつ努力して来られた祖先の賜でもあります。此の恩この賜の一切を否定してしまつて、祖国などはどうでも好い、祖先の意志などというものはどうでも好いものだというように祖国に対して反逆的思想をいだくということは、恩の否定、賜の否定、感謝の否定ということになって、これは神の道——人の道ではないのであります。

（新編『生命の實相』第6巻96～97頁）